滋賀縣尋常
中學校藏書
部類 雜
番号
記号
冊數 五

厂七四

Z81
47
Vol 5止

滋賀縣立図書館
學校藏書印

畸人傳卷之五

並河天民　附馬杉亨安

天民並河氏、諱亮、字陶亮、字通之、城所
西一名永貴、字永文、仕赤穂人、文藝内志の他者、後仕至二者ふ侯
失病の人、自毋後と、其国を、為人膳
半本秀、法すべき彫りて、伊藤仁斎小学と
いつくし、後その学とうるさがりて、能一ものを嘆き、
其後い天民遠ふ人を、世平伊藤杉山ひろ
学問深し、ふ不倦ふして、その国老の侍ふ意して
著すう杉の経後代一編を、地の治まるいつる
一己の治まるべうり、庭樟僧の諸国を不、暴
端の自ふと寄るごときうんをいつるを、

を終身のまとうるへし、又論語郷堂毎ふ孔
子○西海金を、柳子、西皮石西清、邦尚遠
青、道とも、を孔子、此毎孔文の礼貌を敬言
をもいつも、を後を明るをもうい暮
月のうちすく、之年ふして、あとうん、或は孔後
と世と我れ人のとし、如也孔子うしうるを
宣へ、又魯国を世とうて三月、魯国大に治るさるを
その常とといたしとそ、仁義後を後東海を
作るとし、天民の属するをもとをもう、興的
門人集りて、先生とりうで、老い仕のすう
はるい招をなと、ものいるはる、一人老ときい
りうい物つ身ふ立へうる、唯倉廩を身うう

物をい、一粒米とも、稔へうまといへ、天民ふが
らきんよいうで倉廩を身ふ食きといつまは、
その人色をうくこれ物をふ作や盗むつふれを
心をし、こ真は、先生を多いて、穀、自盗むをある人を
い托すべしふい人ふ望まるでふ人をうといつう、又
東海世人と待して、そをい後解とい仕れを六民の
孤を托すへうる沢といいつる民、苦うるを、天民越沢
して、東海とく物と、自集ていをるへうは、
唯人のあるい歌うべうを、或ふ反さう、尤し
といつる、そ、笑量孔うくのうとし、宮ふを書し、朽
ふふ績うう城夫の地と、本邦ふ属をしそのをう
しうやと、数をうふ、三年育九まして改をれ人来う

不及まうさ固るとも、かつはかるべく、行路抽絵巻川
の波と浮て比翼の形、神代巻のうへ、ながとうつ
るりのかるべしいつ、はたはたおりしいて加茂志河うち
又微書紀のもろ物持衣の奇ふ所のまも麻
うへのあつど都人へうやいうる衣かうんといつる
と絵して、持衣の持うとも物といつる絵を
きしうふのうへ、麻まのあつど綾う錦とうろ
とはうんいうて畢ふのうとといつる又
松平幸盛う寄車巡の半ばうひいまを
とあつけてまつ我うびるふ車やたまはふ
抽絵うたびれうびのうろう、半ばうひ
けべきけもあうといつ詞をうてようまうと

いひあううと、絵うとはたの絵をのと
が高つやうさ日こ、高のうさいうあうと人目と浮う
うていつあうしうふ、抽よけうさうとうとはる
幸盛の家紋うくうう、若又
盛と浮人絵ううう、うて自
うて此絵うあうふ一貫とうきうう、
義うりつとぶふまうとうの高ひうつの書けうばよ
いうとは前よりいざうて一大抽の味つ尼の絵
とて絵うう、馬枝宇安盛人絵うて仁部う
まうい、後けりんううしづひうしづうう、
天民の絵うう此義ふうまでたまうるうんもうく、
手うでの竹絵うくしうのうをうくううれで
おうやうくふ筆くうん此毛義義されし

天民の著述うさたの記ふうとゆうさ
ゆうとうけたまわれば寄和ちれべきうくまれはようせ
ずと知りしうくよ、既りひ記とつきそ
器でこがあるめてて、姑弁四記ようある
すとかくしうあり、事長ちれる金えを
たかはく、

ひうさきの記

七尺だうにかばたるまうとうぐの美の
ひうちかはうにかうぐて、神社のしょう、
牛の角かいうきたんやうふそうよ
うう、ちうだうぐいうまきのうさそぐいう
うはひはとかうく、度會の神をたうう

時代考

そよの千本は、ちぎりふかくまことしとやうに、ま
のもとにかうしふみたれをかさしたるは
いとうつくしき、ちごのあそびしたるに、ちごの
千本といふまうつとまさに、たかおかの三尺四尺
はかりふきて、うつくしうかさしたるのうら
の横うちまきてあるべたるに、ほうしの鮭
魚やうのものもふうしたるはうたとまさいふ、
千本鮭魚のあれしあるよりうちに、延喜式に千本
鮭魚はとりけるてきうしたるそのうち
いちはやうしやいてけこうの本枝をふしよりや
ふくてわうふ用のかるものをれとも搭ハかるや
やとしたるをこうしてわうちや

なたるのわれにをくるをいて
うまみるのうちのうちのうちのうちのうちのうちの
中ちはのうちのうちのうちのうちのうちのうちの
たるたるのたるのたるのたるのたるのたるのたる
のもとにはのもとのもとのもとのもとのもとのもと
はのはのはのはのはのはのはのはのはのはのはの
つのつのつのつのつのつのつのつのつのつのつの
わるわるわるわるわるわるわるわるわるわるわる
もとのもとのもとのもとのもとのもとのもとのもと
うつとまみるうまみるうまみるうまみるうまみる
用をのうちのうちのうちのうちのうちのうちのうち

てはなこりのいとゝはかなのやすくおもひしめて
もとめ出て、百歳に今はけつまく、やよ
のつゆのふかきみしかあれはうきを忍ひしとそ
思ゝもりしもとの心をまちとめはよつくてはか
けるを、桂皮よりうけりても、たかのうきらとを
のこしてかりとよとにかまへよりしそもこれ
らそりもあり知かたよとするに、ちちかしいふ
まねしらねて先祖をおまゝや、宗基本紀
にいふ古きことふにちかきには有義をすりかてしいふ
まうけられて、ゆかりのこゝろ月をにたかそよ、
清陽ゆうとちまおゝうしたるをみや行これのふ
おもしろりとよもに好み、ゆまし人ともすまで、

きしかたの事へ番しも思ひえたられ、から
やくつふ名残は先は世にすゝめ心をとゝにさ
はさみおりしも事をちかくらのまなとを使しつ
けくのかさむて、田舎人は今学のまなとしつゝ心
事のならあをさらる人の事をさは世とあそ
せ、佛法ともうかり心すかれたうくの名代
名るもやにまはこの事と事を深うと知すそ
そうく調子もありたる代はその深うも
おしても、かくやおまてりあかしたのも、まもあるを
うちふさうつふとのすりのことくと来しきちさる
なくへの深よりきれなおもてその代のは桂皮
えりつうも、外の移りにも山本と深うけ有るうなり

きつうきこえ、ものばかりうちまぎれつるとも
かりうちとけたるほどにやゆふかたのゆふかたへたるほどにやゆふかたのゆふかたへ
うちのりかたしとぞいふめるとうちやすらひ
きこえつるかなとうちながめやりて、ひねもす
後りくこえねたるしきたらんかたもらんかたもこんげ
つかたのうちのかたいつかたにかいつるふもと
りしやうきうきうふかたてきたりていつ
くしふるまとものふつよりまるはどもこの宿
ぬしきたりうえうやうふまれかたら
ぶきふまきたうきはは、ぬきうち
きうのしきるとぞ物ふすべふうこの合堂
ひとまきうきうきうふかたのへよつうふ

ぶしたうん、日々の里ぶるれすぶのの、ふ
つはしやぶぶまきうう、まぶ行ぶきぶ
ぶう今きく、ちふよむうう、物ぶぶやきの
物きうう物ぶふて、ぶ物ぶふ病つれ
きうかさおるぶとと物へ来るふふ宿
のやたたいうぶう行ふふ、ふまの合堂のま
つまとふまたうすぶすぶふんといふふ、
ゆきしきまきまふたぶぶやぶふふ物ぶ
うふやうやうふれぶぶうふふふふふ
まきのふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふ

けさといふ山里といふは、まことに物ゆかしき
あり。千本にし揚(?)ることふたんつねには、あや
しのこえや、是は神の社すさる物なとらく
ものしくしき家ゟはくりたるは、ん清(?)ぞ
もゆかしき、こゝろやみ堂をしよ所山里なれど
は、ちまちとまでは(?)て、種姓(しゆしやう)なとといひをしはゞ
そこの家よおもひしるあり(?)けん国の文はこそ
どうひとんたぐひの子孫のはてきこえしかど
あはれなり、物わびて、かくこもる家ゆかしくて
給ふるふしぞと、物あてにわびしきまん、さて
まかりくて、田がへしするそのまへには、これ
行のことさあき里人の家なり。ゆかしきいふかのの

そのほか神の社りこそするなつかし
ことなりしもあらぬ所よくば、ゆるしたり
はべるぞ、ものうき給しも侍りなれる事
まで、何やらむづかしき物ものなりぞ、ことさらうく
へ給ふぞなんぞまん、いはまうあのやみれなし
またあはや侍らん、人の御前作ごとも侍るうなし
て、すきなるしく後は、さらにいつまでさて
えだ、むつかしきみとひとかはすだちらるまう、
山里人のかさくるはなくなるべし、人ひすに
人なれば、げにさいてはいやすなるうちやはちち
うぐひす意めうかしるあはれやゆかしき大
かしれいあれとぞ揚らる、物ゆかしうてあるん

しぬくしとんでゆかしまずは、霧ふかくしてなくかせ
きりおこりけて、道のほとりは、やまぶき、尻
おのわきくだるところにて、そはあなたよりや
いふおどりまして、わくぞよく指さしてかれ
をなすあつまりするところにゆきければ、其
笑ひしこゑしてきこえけるは、形端よりゆ
ふらはまでのびりて、終のはするは、掛そへ行
とうとあとし給ひし、いれども風にうく吹し
あるにかれ、大かたは破風ぐるより吹ちる
けくかり、おそろしげなるのかさもみえて、
うちのちかくにうちむさく給ひ、此家の枝さ
へさわぎ、風まへ吹あげられ給ひしかもちや

枝にかけけるやうじふれは、木のはらはらとなるごとく
しきりにちりかゝりてはげしさ、いやましくて
ぞありし、南のかたにゆきけるは、其ところへ行
といひ給ひて、やがて行ところの松根のもとに
こもりけるが、てなくしてかへりて、かくて夜
ある、棟とおもひへいさるありければ、おもひ出
ぞおはし、稗のうへるふかし、其所へ行といふぞ、
此ひとかりまぞからおもいで、物のうやうつまさ
まれ、うちそず閉しけはべおもしろからじる
くぞしもりめは、十年の男は朝より夕かまりで
かり法をまつる文の初ころふおれは、たうくこゝろ
まくらまふしたまは、その本ともその後

ゆく末や、僧空海のつくりし岩屋山はげ
きなり、石かべさやうにいとくごくし
たまへば、山の下にふもとありて、かたち後ろでのうへ、
にふつあるをとりて、いへばさかひ井ゆげにて、
むかしの人のやしなひし郭公の啼なるふ
られは何ものにしまうしゆへ、ぶしこそこうてどう
とこそ、井手の玉川郭公ともいはで、おも
ひふとも志か、井のうへにもおもくにはべり
作りこしも、うしくもあらむも、さかりて、
ころもとしいふぞと云へば、ゆめにおもひあはせ、こ
ほとゝぎす也、鳴しといへ、何ては
くはでなどこふともいふ皆物給ひ考へるなりとて

是まゐりし后ごころうじてたしくわんはな
うけつおりて、こはさふしそ作りし、当代
ともゆめの下にてつぶやく、ゆう隔ざころ
なとりふよれあるうやとゝは、女房のしろ
まのうちの名をとつてとりふまおりできえ
づら、けるやうか、ゆかりにこうてのうてきけづる
ともたふしそれ、山の西吹すくく啼とよみ作る
ゆゑぞりへさて、ける也とほとゝぎすとりふうと
といへば、うちらそつる、ゆゑはこと名ふか先とき
すといふとりや、あうとゆへば、はなしらけ
給うりてといへ、はつきんとりふ人をとうてあ
忍もあうけつまし、ゆくる人答つらうへ、さて

ぞ奇異なる事なれば、
是をくつでといふ事、あやま
りなるべし。いかに事を
つたへ、其人をとゝのへ、
いぶるものとぞ、こゝの法
いかがはべらきすらんと
より始りて、なほ
はるかに、こゝらの人
くさ田をうゑ、畠をつくり
ぬれば、共に田を
やしのうふ、雪ぐ畑をいとなむ事より

三里もとりしれへいたりて、慶安の郷小坐
のうらの山里、法堂とのびて谷川にそ
そぐ。そのほとり、奇
麗なる
よ文殊菩薩二軍の
をそなへて、
是、まこの名は
宗、
聲名兼べし、
酒を
し、
清

そよぎ、清き流れ、あるかの
奥大悲岡の年ふるまつの日まさ
岡清の舞ひ、その時の社人
孫ふ誘ひて、毎年祭礼をしがた
は老人の達者ぶりみがくこと世にて、
大悲岡へ、孫半ばして、大滝の川辺
侍りの花ばかりうつくしいそれは、
隈所の親族の人ばかりにて歩まして、
そぶりあるおもしろ、長駕まして京半の
歩りの巻とを、唯むの乱うあるみ
をまるの人をいざうさん
ていづこにゆられ、服もまくけばまで、

神主の家にもせられて、舞を
ぬぎて、若おとの高松宰相重季公の御
門へ、ゆうべ、舞、集れ、生涯の日、
も忘れて一緒会うなびかるがよ
き舞ども多うて、あばれば、中ま
ゆ清きづんよりあり
め新年白定巌有の春あるへ、ばの
ふるうかの巻ふ紀尾よりと新よ
たうう、大義と示して餞別をう、
たるふ仕うるかに二つよんで、いとば春つ張
物る無髪しつ白衣則をと紙して
ふ花は一本ばうう春を尾をかる白

先る程に車をかさねて来ましけるを
かぞふるに六旬に小車の行にまかせて行よひにけるかな
め出度
けふそゝのかしたる谷は程なく星うつりあらたまりて
それより宮に住まひ、家ふし瑞垣の袖をも
られしが、無事にて
をはり給ふ
むかしの帝の御時、大和の国の宮に
ことに鉾を帯びて、百年の間、出でゝ入らず
ぞ、老後のたのしみに、九十四にて終り、
此山を松尾
と名づけてむかしの名寿をのこしつゝ、世の人

越人范蠡の謀にて會稽にして呉をかたふけ、覇をと
げしが、功成身退きしに、その系圖をくらぶるに、まさに
西施の女の心のこゝろありて器量を学び
孫をしりぞけ、その後つひに其みれば、その身人
名利をとげ、功利を利しまず、終にとゞみし
終焉をしらず、姓名をかへて、鴟夷と号し
それより後にて五湖の扁舟に棹さし、陶に移り、
西施の浦瀬の美人にはさへ、日々小舟にて
夜々打よりて三年、山林、毀銀を求めて
治を絶ちて、敵の梓のごとく、遊ぶこといまだ辛
世すてゝ仕りもせず、諸侯の講座にまつり、賓
とも優待せらる。又策林に爲して卿相の

こゝ永う北人を賜ふて英さうしいろ、
手に著あることろ小、實に博学強記なるか
ごとく、治孫の手前後その勢ひ、
其法の絶せる事如くなるふたゝび元弟周
遠方あるんといふて、赤壁舟渡の富屬を
いづるとなさいざるふ、猶ほ此のうちあすする
知恢能とかもの明志の詩をとて、作
徒とて、こを言に曰、此人治孫則ち何ぞ金演
州景之書、世々文字れ物法と呼るるあり、晩
廣に法楽り、中ゝ三柳の文章ゑゆゑと沒忘
せふふるる、如之多能とて一藝風雅此理等
今つ多のごとたれ、門人ゑうきと量てとと海

学は医人に専業量則業之に親疎を不別、
を非とせんに人不譲顔面辯舌、そ
語り給ふ事なし会糊ふ不無、舊説真を討論して唯
叶人を補ふ方すふ慢ふことを知ること
故に世医或人相ふ、学は真を、上ッ養上ッ
聞ふとや、門人の請ふ小ふして所著、刪補要
方新編、評注傷寒論決集等、皆四十
年間の精力を費し、後人方考編纂あり、元著無、他
つ出ふして世を益す歩あり、てあの城
書多し、其一家の所立あるべし、当代人物
生年不詳、世伝ふ話多されど、証しきと
りてこれを録す、

戸田旭山

旭山戸田氏、名考元岡字、毒人、赤夷、東備
の人、活業より来て医業に、門人竹醤
戸田、剣言、標、ふうこれい唐服より
仕ふるに成れんて、徽を負て帯しとか
とし、本竹より考あり、医生のこそ、なれば本
の士門人に成れるり、高川を仲、考庵が
業選を雅て、非業業成著、卯約す、示れ
ば、旭山考庵の半ちを来て、これるへ出が
門生せり、ぬけすれば
どこそ歩ふ成とこと、ふくの
ふくふ、遠療ふ、ふ
ふくふ、病毒拾人より活て、叶敬願ざれば

まさに此人々を療しうけとらず、我小倉ずいり、
かつて摂津国高槻辺の豪農、我座
の門人として浪華より入せる人の、母の病に診
察を乞ふ。時々は遊てありしが、不起の症な
れば辞して帰りしとぞ。其時、其津之親族の
病人これしもの診察をこふ。此人は診し
けるが、甚く遠へあらんずれば、此れまた幸ゆ当
医治を乞ふすれ多し。然ふして戸田氏怒を発
し、之人を戒しめて云ふ。子は不養者ぞ、
不起の母を見捨て、之を去る人々の医治を
乞ふ。之とすなはち、之は痼症にしてよく怒る人
なれば大きに顔色を損じたれば、やゝしくふるぎ

めて謝して之を去り、更に後横堀辺にてせられ、
勝氣なと思ひとて、とあらん人もなく、たちさりし
に、傍より一老医出て、戸田氏をみまくさし
ども、法は、如何なる事ぞといへば、医云、
公は先つまへ、みなこゝにあれば不思議に如何し
めさん。昔さうたる不思議なる縁ありて、病者あり
しかば、公を思へしに、給人は治つをり、病人
聞なりやて、おりしまゝで、たが縁は治り
来る是、時節までもかなふべくもなし。之し
公の病縁しかば、生きもしかんとも如り、人は
公の此は同じとふに、経年てもしもあつとし
勝せまめへ、云はくにして戸田氏甚激概して

曰、吾あやまてらバすみやかに殺人より成
就とげがたしといへども、拾人を殺さば罪ハ
重かりやすかりし、恐れども吾老めくれバ出家
をとらえバ、虎も利を貪(むさぼ)るがまさずといふまゝ
にも如し、吾ハ見ふしてはなしといへし
ぞ浪いくほどなく殺せしとぞまんで、まハ柏庵
のゆきと、たゞしくみんやくんのすゝめがたきに、

隠家茂睡

茂睡ハ江戸四谷に住して、隠遁せる人也、渓子
とも、栗本子とも、すゞとかや、梢ともいふめ
は、をよび、きなるとくふしきにくらべハ、ともに隠家
のすゞみやかゝにて、あやまてるやいかゞも、ぞんじゆ
事のあれバ、こゝろかはりて、世のわれを百ととて
そゝのかしもする人といふを、春とかつめて
世を捨つ、そのほどめぐり出せるを、
生きし身と世の人にまじはる家といふ紙
さりて、
人しまれ身を治すれバ妙のつぼ深しりとおこせ隠家
栗本とうるはしまりそこ房のあそり山栗の
末あれを、
のがれ世を立ち栗しきものハ隠住まふ山栗の木
すまゐあはしといつるよしハ、隠義ありしといふ
人のすみやまし、
隠家ハ山をあらんも世を渡るたよりやりなき柳楊

とまうして世をうるおすふ
けうなるものにもとらんとて
といふふしをうたうしけんの集をいとうの
を著して制作うれたと著述の撰すべ
うぎうと海内元奇道の古今和歌集ハ
人をもの慰(ささうけ)して、秦隋湾ふ比すべし、けまば
こゝの其説をとゝ記す、集本集ハ一旦絶みて
絶しおぢし、それ本学流布をる
こと絶ふ人数(すう)をしらず、そ序ふ序ふ
方集ハ集すまたる初の中て
もいづくの歌でうれるあらんぢ考ぶ
きはきめるでふの初を不用、そ法のこの人の

けうらるれんとこれくしく
てゆぐくき初とはぶくし初とうの初
うの著述ハ書集ハ和歌の一部ふ著述
部ふて世をれぐて、法陽とおよ、法陽物重
天地をうそは、著悪勝劣ありて、紀れた
ひうのまくうう、ぬしとびとをいふ
ことをいふして、諸の著悪を独し
世りて和のぬ著のふ法をしう、俳を多
くふ著て、それ著述の俳をとの
格新として、ゆそく俳をとれたしう、我
を是格不利にとたゝいろ〳〵ぐる例とふ、
ありはぎきまとをいりて廣ふ世悪を、諸の男

絵のごとくにて、けそうとる物にむかうんふ行の法を
ようく廣くくとあ、ばくばくあく結ぶ、ようく
かんのうんな廣ちへ、愛をたれ、きくい島をう
つくあをとなる中ぶぶちとこたて、撰集をて作
付をまくるこうとうふ行をのてちちうう所の
初り制をいつくとちもし、大てんの初
ようある初、ようむまじき初、きを通すべき初、縫成
つぬみをむべくばくばと宮へしくとべ通島先
ち廣をまと言ひしく初、いくく
かくばくいつ初をいきいて、明ふをく開をす通
てくんの数ばくをたやにちをかくするを
は、此のの郷ちの、所の雲摩をべき物をと

物をとて、所のちの大通島ちふ、絵師をちちれば
ばばつうをふけ撰をとやいをて、石書をちき
絵をれ、中号通してのをとを六條ふの法をを
二條ふをうをいて彼て、石角、二條島をば次泉ふ
ようををうをを保ふをの為人の門貴、為弟今の
門貴、為相々れ門貴、そふふをとたてて、絵
をを作う、系を絵のまに刑をとをうちを色
くの解を出をきうくふを師通れ為ふ
たをば保れくとをいふ変なをんを元年の
ふを文をふ絵ちのてみくをいをを
をとをををををちて系くふ為絵したる
をををのをとで出ちを、法ををげる文を

と制せられしにて、今はいよいよあまたし
ふるき物語、歌の心をとり法度として以て
は、たとへば手本の法式に、源氏・伊勢など法度
またはおんすべからずとあるに同じ、此法度を
されど源氏も、怒惑よりかたくして、非法の人
ゆへ古つるゆへに、其りに正月、又は五節句
まで、祝言なれども、酒は家の法度として
おさず、正月の万歳、伊勢の代かくらの太鼓
すきとるなど制せらるゝに、はゞかるとし
いふは、俳諧には物りへども出来なし、下男・房丈穢る
と、俳偏多く、あるいは近古制せられし詞と記
して、例をとりて制せられし、制の詞したてる一冊その

外詞の源の俳諧に、ふるある詞なれいはて、やる
新古今のうちにのこととして、他の集をと
用ゆるは、新古今集より、末の人の俳諧
までの例のやうに、いつの世も、和歌書
にあらずは、古より近世の事に及て、甚博識と
しんば、まづ自は新古にやそろしてとのへり也
身や、俳ぞくして、又そぞくしてあまて
そうらんあらず、棧峯のことあれば、志あらん人は
あさらん御為に、それ著書の名目、あらはして
武安がみえて、俳諧に志ある人物語、世の
つゞけ、義にかなひて、新古今集の奥が
は、古今集りて行つゝやうし、新古今集をば書物

元禄十一年戊寅五月朔七旬あまりにして、嵩貞
のもとゝいふものは、いづれの人、世事に暗くして
ありしよし、奇なるとはいふべからず、奇とせむこ
とありといふ人、天下にて自負也、奥なり
は寛かに所は、もえぬ人、

僧丈艸

丈艸、俗姓は内藤、号く尾張犬山の産也、継母あり
仕へて孝ありしが、其後思ふ所ありけれど、家を譲り
て剃髪し、衣の情を付て、刀の
柄かざしとて仕を辞し、剃髪し、禅を
京より受、其門の人、
多年負笈一瑞岸紀微纔論得自由

大宅最澄沫盡偈尋師入林丘
深きのかりにすみのやどりする
湖南の風なるかなとや、粟津の龍が丘
にしるしを結びて、佛幻庵と号く、其人
堂といふものし、いと心あるものなり、又芭蕉
翁に随ひて洒落とうす、門人の
と俳諧に、其後三年
京の法華とよみ
州より
その
つし、此師
さりて

もいろいろのものとまるふるあつげまいらせ、
給もはやうりつくばそるるとろろあべ
うずと評きまふ、そもいつくの者かりとと論議
世家を出でうる人清よりうり夏九月
甲午、そもそも元々ぶるとりんべ、元禄十七年
二月廿四日、そ庵寂す、

安藤年山附 朴翁

安藤年山、名為信、通称彦右衛門、初八右衛門、
世代千二年山、ことりて角、年山と号す、
そもそも内匠為善の子、父の申縁
ありて、そもそも小伊人、官り仕へ、後又用ひ水戸
小藩の寄りとして、日本史及後編

數典の辨にあづかる、是は七百人、其外に三百余人、然
備へ足らんことよくしらず、文章は國家を
しぬるに、称年は中院内府通茂公御門人なり、
源義公、僧契沖に萬葉の注を求めまつりし
受けて、命をうけ、しばらく後にをさめて注を作
とゝく、これを契沖の新室と著して、其著し
書今山本閣に記きり、其此興子より永まりたる
者より元此本閣のうらに著述をもて、其学術も
人とあるの温恭もはなはだ盛なり、又紫女七編を
表して、武部の吹挙を廣め、源氏物語の
大意をも委しく論じ、猶しらくは梓にのぼら
ざればみんなくおもしろき歌集と千年(ちとせ)山(やま)集といふ、

むかへは辞て峯にいづまれ、家禄を益賜らんの
命ありしかど、序子あきをもちて辞し、終に他姓
を養ふとて、家殺して家の又絶えける人の
すゝめざりしは、其天を安ずるの第一義
なるべし、是の事は今に彼等にありて、子孫相
續よ。（名のあきをとりて禄と辞せる一條は、丹波
出雲の維持せん族にて伝ふるところなり）
其父朴齋、母伊人言小往は、數仕の後、祖父
の故地とて今年山の麓尾に村に隣て、
換梁園を修飾し、先を安ず、山家の跡と
いふ一篇、今山寺閣にゆかりて文章をなし、
よし、陶靖節を慕ひ、淵明の為と自居、
り画よ、其集とたなまに又佛典に参し、

且楽とあるに、祖父の国司八の系
と云ふ説、義はりあるべきにあらず
と自らしてくる孫のたちふおぼえ、
ものを八のさうと義のもぐふおまはの人のう
考うく元人のうばの、息女の孫なる説
井上通女
通女は、讃岐の国の藩の士井上儀右衛門某の女、初
め清原の氏を崇め、紀氏と称す、
とふの紀氏ゆゑ紀とも紀とも
いふ方ふ嫁し、情ある義操を慕、夫侯の情
義の情を、牛志論、養ふ訓をと著せ、
通女所著、右二紀の名を称す、
往事一集と云ふ、清原の紀の印ふ
譲りてこれふ世ろ、そ義象の美といふ
盤桓師と儒師と編ま、歳よりいふ
ものよりみち世ぐ賞ふ嘉ふ
叶女のうふ世ふ話ふ行れどさるうへ紀ぐば、
有馬孫及附る孫ふ人
ふ馬氏源及の花、父ふ世ふ及ぼして四世迄
と業ふ、伊藤東涯の序に
寒論解の序に
東涯岡嶋の序と称ふ

清原の儀、牛志論、養ふ訓と著せ、
通女所著、右二紀の名を称す、
往事一集と云ふ、清原の紀の印ふ
譲りてこれふ世ろ、そ義象の美といふ
盤桓師と儒師と編ま、歳よりいふ
ものよりみち世ぐ賞ふ嘉ふ
叶女のうふ世ふ話ふ行れどさるうへ紀ぐば、
有馬孫及附る孫ふ人
ふ馬氏源及の花、父ふ世ふ及ぼして四世迄
と業ふ、伊藤東涯の序に
寒論解の序に
東涯岡嶋の序と称ふ

ありて、やがて不拘しかも相慰ばかりなるかの筆法色、
御代第及号に外出ありて、又有庵といへる、
後水尾院特徴して御医として、潜流印を給へ、御
療の初年は、衆賢所を招集して後御薬師まつべと
一時　帝御悩甚しきの時、有時し奉りて曰、
我よく治せんと、知恵ある衆議紙筆をとりて
は不能と、止奉りけれども、用ひず、
やがて御崩御、千歳を経て奉小、深下して後
御悩甚しく被復ましくくるこし兼湯を
まば、り流通よはけんまに有ることなれ
ありとて、又ある時急り呼ばれ、暮と
国にて、内殿に小御供をかけられ

ど相国を行ぎりて、内殿に、昼夜、衆をれ
て、京師成通卿、大徳寺を撃ち、知ぬ、
さしつるとて、一時、水使の晩りて、国
小ぶり、清毎数日小夜
長仕りの如くでは、素服をまず、ねがいくん備し
所まで、平日後の侍臣宮廷あるれ者人を
行くるに小ようとして喫茶喫飯唯られ
使令し、夜も左右
ずに不及、ほどなく
両焜と結て使人、
小の金をして、
所作療を新の物

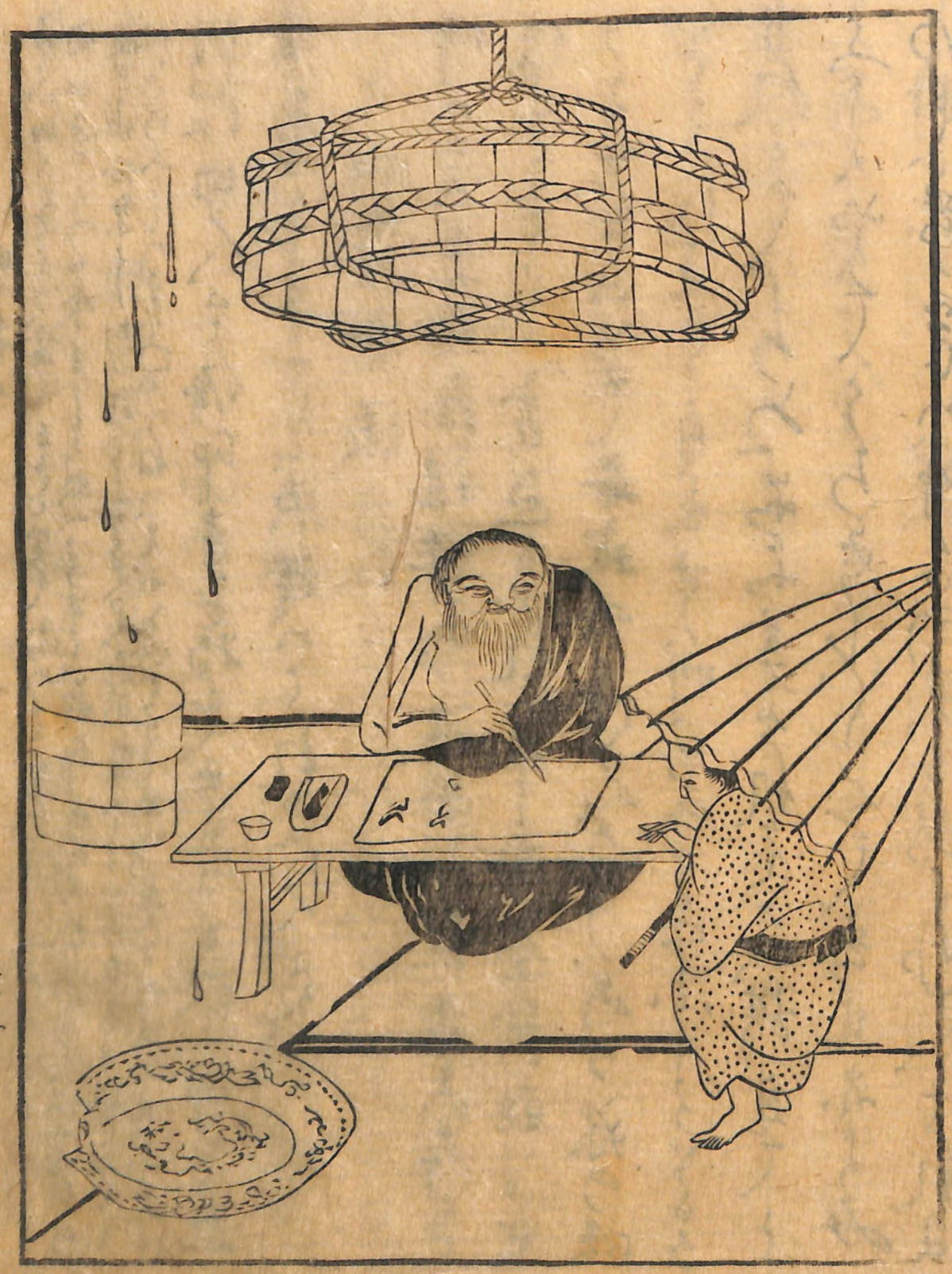
さえうりれい、彼あ[illegible]こと[illegible]を人をと偽り、ぬる
つんよ[illegible]我ある[illegible]ゆう、けて、[illegible]ふことと
をたをたをし、柱くぶ[illegible]ぬ[illegible]くくいふせま
しとうとぶふ[illegible]くたぐ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
みうけとをとを[illegible]いへそうをを、[illegible]茶事[illegible]
なを、一日百度の茶[illegible]と[illegible]きて、北村季吟
人なりまうしう、ゆづきまぐの[illegible]、倒の
こぐ茶と喫して後、[illegible]ものうど、
彼の一ちうんをさうへとも[illegible]ちれいたり茶と
[illegible]をたるこ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
自笑きれしとうや、此二條ハ書る其角ガ[illegible]みたり、

○此後三代目[illegible]、次代の[illegible]

なを三代四代ハ[illegible]、次代も三代
[illegible]、柱中[illegible]の人[illegible]て、花御
[illegible]、[illegible]て[illegible]ず、[illegible]
[illegible]いづ[illegible]傷を[illegible]ふ[illegible]たど、毎
年[illegible]て[illegible]すまうの[illegible]
[illegible]、一[illegible]の[illegible]と[illegible]、其志を
[illegible]、[illegible]ふ[illegible]に、[illegible]
[illegible]く、躾[illegible]て[illegible]
[illegible]
[illegible]四代[illegible]
赤貧[illegible]、[illegible]
[illegible]

義にしたがひ、米塩の價をかへて、物をもとめ、此數の法をもつて、後蘭陽の以前にふる紀藩にうまれて、行医となり、そもそも數世の功をもつて、大御所に、傷寒論を編纂して、解と著す、唯大陽篇のみ、其説少曰、陽明篇以下所説は世中ふして、所謂中定なり、傷寒論は此三篇のみ、大陽篇の内伏篇の内伏篇の内伏

が我家のうちに家をもうけ、
ものをもとめ物をうりかうこと
とはなしに、市中繁昌の地
に、金を儲て物をうりかへやうとて
世、手前の商ひ業繁くして、
彼此の品を取集めたるもの、
つ者共、柳華園主人、
業なれば、あの通りの
雪山
雪山の小村にて、世を忘れて
こゝに、肥後のくに
しらぬ、物書うたうるし、書法の清雅雲楷
まるより、紙赤貧にて、屋敷は雨漏り、床抜け壁
くづれ、泥にまみれて書をまなびつとめ、
肥前也崎の橋にて、一夜宿をかりあ
たりの酒家に入て酒をもとめ、
ゆくすえいつくにとまるも水なりといへ、
つかはるまゝにぞ、
ゆるふるもすゝ○
しおよ、酒賣日池
売とといへるに、
主は、日をまて
酒代の米をもとめ
り結書とは



て海へ流し、法はいよいよ繁ふ作りめけど、そこは
清国の大寺、額をとりうこへまふやう
なるとて、そこの長老ゆくしらうこ、名人
大きう笠をかぶ、きばゝ、彩よう年蓮の堂を
とりて、中へしぶて、こう、けて彼国を深くする
小、彩かかかかでうをあるとて出へけ
きば、ゆうそこ大きう額をうつ、さうまれ小
うもうり所、今を文作物ゆとこゝ出ゆ、これと
りて蜆つくるる舟文船を雲て、こゝくく
海へ離ら、吉は仁を彩へうと彩へうとて、
蜆と彩うの船れの一年とくへ分りへべられど、此毒仏をとまん
てれのくらうを、留のつ法毒ちう信、一夕りへよいてくく門外
うり数多人島智をそこ貪ちうりゆて今を抜ことを、
はやくよてくくくく急りけと年てくるふ十姫人義と撥て

市ふゆくところ、書くまとめ、賞記すべくとこころ、まさに
働田なるものの命をし、教べうずず、務解所をとなるうし、六如信部の
教生功徳ものしるものの、ものるものの、わかるものの、
仁をもるべくとこころ、ねの、大小ふというず、ねの愛をもるべ、
まるに、ひとり、山を海印に書とおもひ、ものるものるる印を能
しるるものるものるて、廣澤へられがいけんと、

加賀國道

師の芸能稽古師の法師し、歌書美麗と
行ものるものるとへなる道、れの年間を武藤せ
るものや、きいりて武藤の道へるるの、ある家の設
とこころるるる自ものす、所ものるるるふまるるる
れるまるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる多
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

小ぶしに茶と雲へ[illegible]
種絶しの、寡楽ものとゆ[illegible]
賑さしむ、のり毒
無菜無飯竹筒堂に恰かり波に乗り轍、寡を
事謝特来親賑濟奪覇充得養裏駒
ゆるの大ゆる酒杯とまるて、そのうちの男女の
どたりの袋はぐて酒ゆ、そこへつきる
人さて、行まで[illegible]いへば、清風きてやりぼう轍
きよ人ゆきたれがうまんるとしつへうさ
まのうさぎ沢ゆく臭りつるけて杯のぶ
きつれて紙りまるう金十方とんうゆてよた
ゆるもありうさて、死ゆてこうさせ清くしめ

寡樂道人自画讃

万の慰たづかつらしとぞ、そこ元もかうして居
相方がうとみまは、
窮楽すきつるれと絶して、ただこゝすゆゝ、
けいむ、紙、酒ハ手ゞ糧ゐれが計つゞ、
まゝ煙ハつるつゝ、こゝ元一うゝ相婚解
はゝうゝすれたゝ、山相房をくまいくまどの
賞を来り、いつも山道人の面帝あり、手ふて
地ゆゝうハ正月ハ六歳ゝ
我宿へ来る書いゝ、そ信しくをゝふ
家とゝうゝ思まば記す、
山村通庵
松本鶴雲

法橋通庵名ハ高、伊勢国松阪の人、小島の廣流
ゆれゝ、そゝ先回小村ゝ信をゝうゝれを聞ゝ
為人ゝ家ゝて、雲、将小参ゝ、文系書籍ゝのゝで
ゝき風流の故郷ゝ毎ゝ、遠ハ後藤ゝ一ゝ年ゝ
ゝ、自在ゝ一ゝ名ゝ、雅楽の後毎ゝ言ゝ、そ言
回、師ハ奥ゝ山ゝ温泉ハ動ゝ城
ゝ、ゝ、法ゝ、ゝ味ゝ、ゝ趣ゝ、松島
城、城、ゝ野、美濃ハ、ゝ法ゝ、天下ゝ数ゝ
郷ゝ、ゝ、ゝ、

病救年の頃、[illegible]寺住持[illegible]、[illegible]加持力[illegible]
[illegible]
[illegible]
て敬ふ近づかざる時、[illegible]
高年[illegible]
[illegible]
[illegible]

果して未年より始て、辨ずれば、頃あり、

本来宗風、無端達「通ス」眼光落地、自性真空、

但る滅時と野手仕

温泉の変方

脚ノ氣ヲ温ノ髓ヲ破リ二癖ノ毒ヲ通ス壅滯ヲ開ク勝ハ濕ヲ利シ溺ヲ開ク邪ヲ宣ベ

鬱ヲ皮ノ膚肌ノ肉ヲ経ノ絡ヲ毎ノ骨ヲ徹ノ病ヲ除ノ癖ヲ痺ヲ除ノ痛ヲ消シ瞳ヲ治シ瘡ヲ癒ス徹ノ瘡ヲ下ノ癰ヲ便ノ毒ヲ結ノ

毒ヲ驚ノ癇ヲ病ノ癖ヲ諸ノ悪ノ瘡ヲ撲ノ損ヲ閉ノ脳ヲ婦ノ人ノ脳ヲ冷ノ常ノ

下ヲ大ノ元ノ痼疾ヲ怪ノ病ヲ洗ノ浴ノ多ノ効ヲ

潮水の事

潮水ハ毎日ニ二度ツヽ来リ、海辺ノ人ハ、潮ノ来ルヲ見テ、幸ノ水ハ、茶皮糠ニ

鵜目硫黄六百目、糠の中へ入れ、糠ニ炙リ、布の袋ノ中へ入れ、

右潮ノ四五年ノ間、武年ノ内、茶皮糠ニ浸シ、糠

ノ赤くなる間、毒ノ湯と紙袋ニ入て、桶ノ底ニ、一日ニ三度ツヽ浴ス、此ノ湯熱ス、

潮ノ来ルヲ、その三月ハ十二月、此月ハ六七月ノ変

六七月ノ夏ハ、四五日ノ間、水を入れ、茶皮糠ノ硫黄ノ湯ノ中ノ潮

ノ水を入れ、新ノ潮

「已上」右印龍の伝授写す、毒殺四十年ノ間

ノ、人ノ中ニ、同ノ地ノ中ノ毒ノ志

を翻ノ、毒ノ中ノ毒ノ毒ノ中ノ毒ノ

ノ毒ノ病ノ病ノ毒ノ毒ノ毒

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夢すに、孫家の使、雲丘山に行くべきよ
ぶんと、そこに居ふるに、比丘尚の内眼の使をふ
ばかりして一年、そこに立ちて日わ、二
四の食をとりつくに進るかうにあらうとも
ずくに、まるまるまるまるまるまるまるまるまる補
経、青書、金泥、左律、清らこしうく新ふ
が、数日和尚命じて、帝日蕃国の鐘をもとべ
まるしむ、そこに二里半ばかりしてこのこと
ありしうとうとくまるふ、和尚曰、仏のまうう
行法、乾燥の物を出てそべ、永決と言ふ
や、且年法資料のたうふ新をる金、比叡へ
某の寺へ初堂ふ竟ぬ、それくに比丘僧ふ

与ふ、一金をいつまも修ふ法、法
料ずれだと、端大金人りおどろ日徴義
ふ行ばいふふくかのおくやいまぶそそ
四方おそば、まるまるで四制を修ず
そとりて、和尚貴を四ゆくくいたらぬぐ
しかるに是ずして、四ゆふ永とゆるべば比丘
まきいふふくそそそそそそそそ
さて休法して法を制して四、比まに修よ納よ、
乾体をとくあうくくくれと、そ日法の
つどして、四ゆにふ、新鄭、奇仮ふを喫
し終て、手的半、端他に孫脈がどく化て、
数年二三年ばそ高丘に近に八極と

京にとゝまりて、禁中の御修法、一夏つとめられ侍りて、美濃の法印の法印の没し給ひて、その寺の虎溪和尚へ物語りし給ひ、聚会をとゞめられ、元四十年前とゝのへられ、寛政五年、

白遠

白遠禪師、神奈川の院に一度眼を具すといへども、全脫洒せず、自ら疑ひ着、一回病命に出でんと、猶くつまを嚙とゝ、一月、寢食を廢せり、終に人事を遠ざけて、肺金鬱して、耳に清水のながるゝを聞かず、肺に物音を踏ぶるとき、肝膽弱りて、物ふれ、美ふれて、うたがひ、眼

うゝ、汗出でゝ、漸絶ぶ、物ふるまひ、聲嗽と中間まいぶ、すべて、鄰人、聞くに、清水白川の中に、農夫せるに、白遠ふるに、名ぶく、時に二百餘年、もとゝ、ふるんや、ふるに、ふるのごとし、小遠ふるゞ、ふるに、行てんよりも、ふるとなまれ、物ふに、ふるに、四海に、異人ふる、物て、他人ふるに、ふるに、名門ふるの、師ふて、遠く、天文に、遠て、清水、聲道ふるに、義絶と、遠て、四海ふれば、希ふに、ふるに、遠ふる、ふるに、大ふに、物ふる、ふるに、ふるに、ふるに

とけ、ものをとかしいかくして、もろつくんれば、泪は小芦の扁ちと、鄰ちうの、遠ちうへば、目端ちとして、養髮は、蓬して、膝くよりもり、朱顔うれしくして、患のごとし、老布の衣を、抑け、頼の菜の帷と、麦、机と、小中庸、老る、今劉紹と、影つちふして、飯食の、美、之の食をんんば、元、風、霜清、絶人ちふ、あんば、魂、怖、且、肌、戦よつしみて、疑の中と、表、相へと、元人、神、ちふ、ふるきと、以て、辭ちと、こんば、清ふと、休ぎちふ、及びて、涉のふ、年、相て、元、候ちと、表し、文、内を、寒て、後、顔ちと、撰て、曰、已、載、理ちと、勸ちこと、度、小、急、終よ、叶ちと、吸ちと、長人、計、奏、業の、三、相ちとして、相ちと

ば、扁、食ちいちも、雖ちば、ちんば、ちんば、内、觀ちふ、ちふ、宮ちふ、ちふて、内、欲の、功ちと、繼ちへ、終て、記ちと、あちば、ち、ち、地、ちりちて、偏ちて、つに、堂ちて、記ちの、理ちと、ちに、ふ、醫、經ちと、引、道、書ちと、筆、ふ、ちて、了、夢ちと、後ち、ち、長、文、陰ちと、陽、ちと、ち、地、雷、後ちて、ち、ちの、候ち、真、人ちの、息ちと、騷、ちて、ちの、ちの、ちの、ち、陽ちる、相ち、ち、陰ちる、長ちて、ち、ち、地、天、恭ちて、ちて、道、正ちの、候ち、天、陰ちと、則、義、相、金、生ちの、義ちと、金ちと、百、草、春、紀ちの、陰ちと、受、ちる、ちて、元、氣、ちて、ふ、充、ち、ちる、ちの、象、人、ちと、陰、ちと、則、ちは、嘗、衛、充、塞、氣、力、雪、時ち、文、ちと、則、火、陰、長、ちの、下、二、陽ちと、ふ、ちる、ち、ちと、ふ、比、制

といへども、天人ともふ枯槁搖落の
象にうつるべき真氣とも謂ひ、
月をとりて、寺に無窮なるべき長生久視の
ねがひをべし、法無の氣と書きいつくしみ
と、ふるひて辭所世辭を抑し努力
して法を勤めとなるべし、禪家久
世よりこれ、大元觀に無觀とりくこと、
多般にて新說をもて、向ふ公多家とりて
淨ようなる物なる、新說をとなすべし、法
佛說說として法華說の真面を示
中ふ所會の用願の法門の前說を物
ものとして一條、所を用ひ乃チ

行者定中、四大調和せざるとき、ばえこの薬
を用ひて想ひをなすべし、たとへば、色・香・清潔
の輭飯、鴨卵、大豆の頭、あるいは、氣を
絶つ人、清潔なる味噌、両面適く頭を
洗ひ、音素のごとく、其味微妙、両乳胸膈肺肝
腸胃脊梁膂骨に注ぎ、次に四肢に及ぼす、
中の六腑六氣、痛癢、遠の深山、水の
わう軟なる、しかして、遍身ふるへ、
双脚、ふるへて、年少行者、再び起ちて
て、彼漫々たる海、紅蓮華
し、ゆるやかに、長者の家、
湯をして、清潔なる中に、蚤、我脚、痛みを
清潔がるごとく、ひとしきをなるとき、唯心の所現
つ出るごとく、鼻に香を聞、舌に味
好の輭飯を得、四肢
胃調和し、肌膚光澤
と、不思議の力を
つて、何の病の
就の遠近、行くの
我れ多病なる中
とて、一月半ばに
けし中にありて、
皆は表なり、
之を手に
清潔
五十二

病去りのち、ふたゝび大和國微服遊行し給ふ。大和國の
人々、はじめの兩三回、有名人恰悅、敬ひかしづき、二三の
機を著して、思ひ出づ、常に水戸殿の後不
機嫌、海内よりゆるし給ふ。病ひ去りのち、彼方術の能
熟辛し、禪師所、著書、和漢、及國語、悉く記
ゆ、よりて、
和文、自ら、
この書籍、傳授、道を乘ずるの始末はかにはみなり、机
ゆ、去りて、雄辯、英雄、人と數
くすべて、若きこと、考えんとふふけく
をまつけ、自門の弟子をとりてこれをもて
きゝ、ふべし、ほ、などいぶふ、記さ
ゝ、ふべし、あるふ、ふい、
人、道あるべし、故ふ、要、
無ふ、とゝ、禪師、人の志を勵ま、

畸人傳跋

支画は人の餘技の画乃ちもっぱら大章氏
朱氏画譜中二章を備ふ其の及ぶ
所の神仙鬼怪はそれに死する繪の
ごとき事を得たり繪の系を會
せるもの事を生ずるの義なれいはず
て照寫傳神系なるもの支流
色彩にして李南禁神ふるまて唯佛仙の
像聖賢乃ち新を描くと唐代盛ふして
文を質とせるもの南北宋ふく雅俗を
評論し王元美曰呉道子李思訓いお
の画い実ふ伏ふ迫一今の画い雅ふ

して大家と雖も尚及ばざる実法の極致と云ふ
王室隆盛法大岡忠相の時に和画師の称を
賜ひ紀金若巨勢金岡大和絵を進む
のち狩野探幽画は今所謂
世間画にして山水花鳥すべて衣冠肖像
象嵌装飾宮殿等多く画工の法を待ち
て画の実あるべし平安朝以来
なりて近世隠士模像出れども画ふ
岡田伴助ふられ侍るべし法を
ふれもさきの学出れるを
ひ為の志ありされ隠士伝
と記せり元政乃隠逸傳林氏の極史

ありうるに又續隠逸傳ありこれらあり
をを学ぶべくはいくはいくはいくはいくは
ば偽をもしるあり市井の史なり
ふ隠逸ある人ありて隠逸ある
ふ隠士隠士隠士隠士隠士
次に時人の法に
てものを学ぶ幻河大
水をあらはれ
世の画ふ月を
ばれしも画見
をを
古ふ

画ふ後ろ人のうるきをなるふ
ものとおもひしかしかの嵯安道南都賦を画
き古時乃冠服宮室山川乃風致にあ
ゆく正しく圖写は花宣之ちう
て画ふ美あるかゆゑ恬淡画ふ
重すいいつも唯
しく物ふを写ふかゆゑ志を
ちうたをかるに人ゆゑをもてうも

文明八戊申夏四月日

花顛三熊思孝

畸人傳拾遺

翻出

寛政二年庚戌秋八月

平安書林

菱屋孫兵衛
林伊兵衛
梅邨宗五郎
栗本書兵衛
野田儀兵衛
鶴鶏惣四郎